

新
朝
演
目
全

特 60
551





肥後国
普川
家の臣
宮木慶助の
一子小三
阿比楠次郎と云者あり

阿比楠次郎



U26220



幻名
 阿蘇松
 と稱したる
 容顔美麗にして
 才気あまて
 七八才ふりて
 国は逐れ備前
 至り親戚野沢の
 家小寄寓に



能く書史に通し
 諸事小敏なる
 主音川も甚こきを
 愛しりてハ又同明の
 妬み少なるらば遂に
 寅吉なる者を切言したまは

巻二

既にして
 年十八
 女
 小至り
 時よ
 青雲小
 志一
 駒沢の
 家を
 辞一



巻之三

それ
 が
 為
 父
 諸
 とも
 小
 国
 を
 出
 る







五





萩野祐仙なる
 もの此頃深雪の
 容姿を見頻まふ
 戀慕こいぼし
 橋啓庵はしけいあんを
 語かたりて祐仙すけせんを
 阿菴次郎と計はかり
 啓庵ハ祐仙より



金若きんじやく下したを
 貪むさかり
 弓之助ゆまのすけの
 仮宅かりたくに
 連行れんぎやう娘むすめを
 引合ひあせりるが
 元もとと里人さとびとを
 似にせさるる

車くるま不興ふきやうならば
 其その場ばを
 去さりゆ



阿蘇次郎ハ
くる事とハ露あらハ
秋月の家ニ至リる不

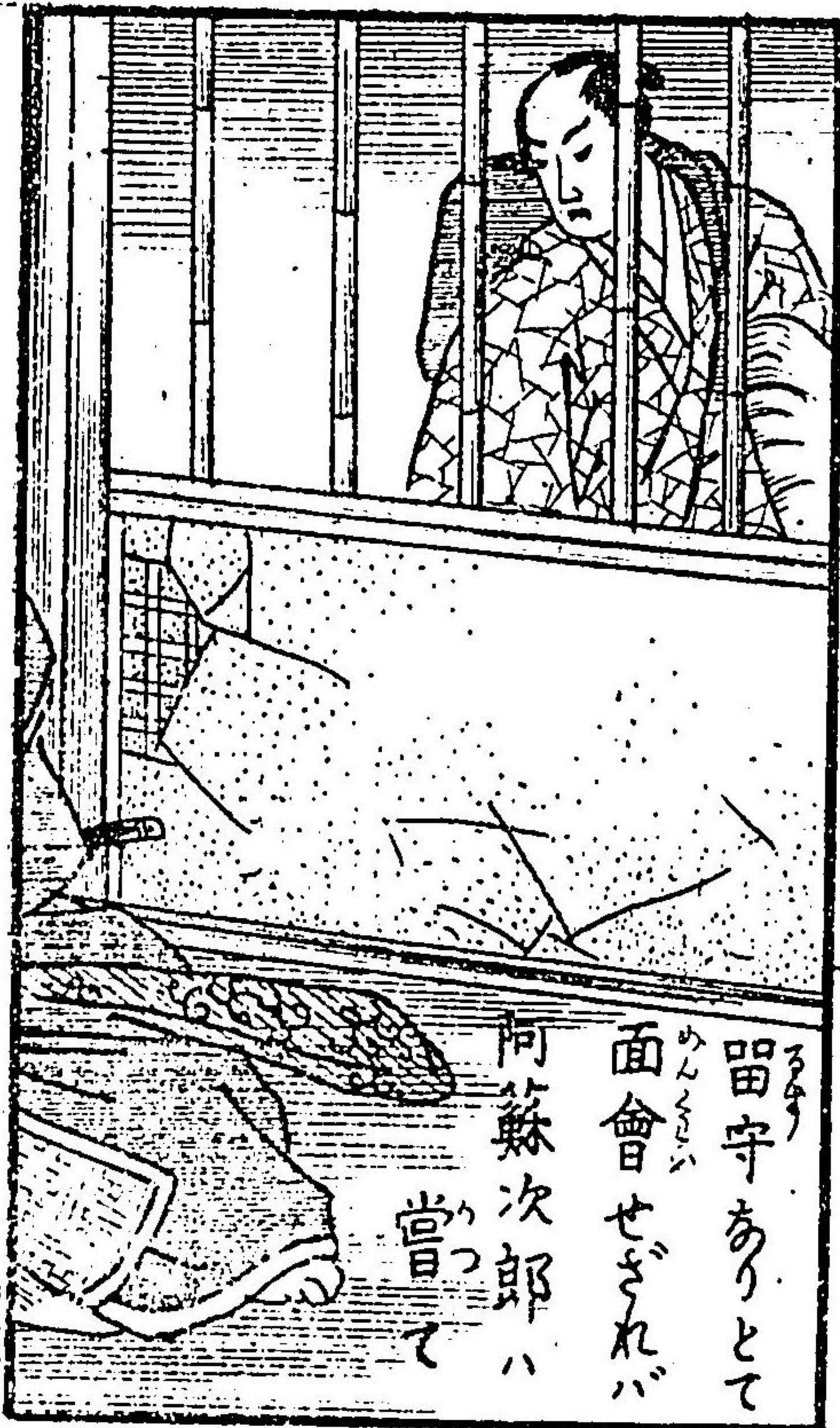


阿蘇次郎



彼の船ふく出
 あい、此家の
 女あるに相違
 ありまば
 弓之助の
 疑惑も有
 ろん杯思案
 立戻りらる

あつは



留守ありとて
 面會せざれば
 阿蘇次郎ハ
 嘗て



深雪ハ明石の浦小く阿蘇
 次郎亦出逢互ニ意情止免難
 既小偕老を契リ一モ此時父と共に
 同船なれハ遂小其

別
 場



阿蘇次郎
 の伯父の駒沢
 亮齊ウ主人
 鎌倉参
 観の

御供
 病小ウ、
 次郎を我
 が跡を譲る



娼妓ふ惑溺しけれハ
 次郎左五門ハ国元より
 馳せ赴き主り
 放蕩を止めこそ

忠臣

あれ

新編十



主人

伊勢田倉
 之助ハ鎌
 くらふ在り

此於て

蘇二郎ハ
 野沢次郎
 左門ト

改名



扱も深雪ハ一通の
 文を遺して
 博多を出て東を
 ぎりて走り出れハ
 弓の助大不驚
 次郎左工門ハ病死
 の跡小言やりける
 深雪ハ途中小人買



小言らハ...
 沈ん...
 せも漸く
 ふりて都へ還り
 遂に盲目さなる
 泣く鎌
 倉をさむ
 赴けり
 遠く濱松



庄や
 徳
 右五門の
 助子出合駿
 藤沢駅小
 駒沢次郎
 左工門小



廻り
 逢い
 一が盲目
 まらば夫とも
 知らぬ駒沢
 金子及薬扇子
 遺し出立せり

第
 十二



出立の
駒沢の
深雪



跡にて
徳右衛門
ゆりの金
薬二扇を
持参扇の
もやうを
見えて
おぼし
かた
さては
今の
ゆ方
が

第百十三



阿蘇二郎様
 までありーうと
 在氣のごとく
 追ちきりり
 共ニ徳あつも
 氣つゝい大井川
 追走りーり
 俄の大兩にて川



留ニなりぬ何ハ
 せんとする
 折柄徳
 あらハ
 駒沢より
 もいー薬を
 出切服しそ血しを
 しませてこゆ犯ふ
 吞せハ物まで全候す



駒沢り斗略ふて
 宝刀もふ入て
 譽言を著

巻の十五



岩四郎
 源太
 諒及
 あら
 て





明治二十年九月三十日出版御届
 同 年十月三十一日刺成發兌

定價金貳拾錢

京都府平民

編輯並出版人 内藤彦太郎

下京區第三組大壽町九番戶

